

最優秀賞

## 祖父の入院から感じたこと

前橋市立南橋中学校 一年 高橋 優斗

「おじいちゃんが自転車で転倒して、救急車で病院へ運ばれたんだって」

昨年十二月、母の慌てた様子に僕は最悪の事態を想定した。祖父は九十歳の後期高齢者だからだ。なにがあってもおかしくない。

祖父はかかりつけの内科に自転車で受診したところ、傾斜のある駐車場で、よろけてしまったらしい。右骨ばんと肋骨を骨折したが、手術はせずに二か月の固定、安静ののち、リハビリを経て退院した。

祖父は五年前に祖母が他界した後、高崎市で一人暮らしをしている。退院したといっても、すぐに元通りの生活ができるわけもなく、週三回デイサービスに通い、週二回ヘルパーさんが訪問することになった。プライドが高く、人の世話になることを嫌う祖父が、うまくデイサービスに通えるか心配だったが、それは取り越し苦労に終わった。祖父は以前よりも生き生きとして、

「たくさんの職員さんが話を聞き、リハビリを助け、世話してくれる。一日中、家に一人でいるより、ずっと楽しいよ。」と笑って話してくれた。

僕ははっとし、気付いた。一人暮らしの祖父に必要なのは、何よりも周囲の助けであったのだ。

人は、コミュニケーションなしには生きて行けず、最悪、孤独死も避けられない。

統計によると、一年間の死者数百二十五万人のうち、三万人が孤独死しているという。住み慣れた家で最期を迎えたい、という独居老人が増えている背景があるからだ。そして二〇二〇年頃には孤独死が年間二十万人に達することが指摘されている。

大切な祖父、そして僕の家の中にもいる高齢者に、中学生の僕ができることは何か。

まず、離れて暮らす祖父には、できる限り電話で話をしようと思う。日々の出来事を今まで以上に伝え、共有していくことにより、祖父の様子がわかり、お互いの心の支えになれるのではないだろうか。

次にできること、それは挨拶だ。知らない人に挨拶するのは少し勇気がいるが、こんにちは、今日は良いお天気ですね、と話しかけられて、いやな気分になる人は少ないだろう。僕は毎日歩いて通学しているので、その登下校で挨拶を続けることによつて、ちよつとした変化や気付きが生まれるかもしれない。例えば、いつも庭先で花に水やりをしているおばあさんが何日も姿を見せない、もしかしたら具合が悪いのではないか、などだ。

過剰なほど個人情報保護が叫ばれ、近所でも人とのつながりが希薄になっていく世の中で、僕にできることは小さなことかもしれないが、まずは明るい挨拶から始めていきたい。そして、それがやがて高齢者を救い、住みよい街作りにつながると信じていたい。